
冬風よ、どこへ吹く

imaginary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬風よ、どこへ吹く

【Nコード】

N0823Z

【作者名】

imaginary

【あらすじ】

高校三年生で卒業を控えた谷原美津子だが、めまぐるしく変化していく周りの環境に戸惑っていた。学校では就職試験や大学受験などに備えて勉強に本腰を入れ始めたし、友人である小西茜には野津良平という恋人ができて、親には「もう少し大人になれ」と急かされる。もうちょっと子供でいたいのに……。すべての純粹乙女に告ぐ、ほろ苦いけど甘酸っぱい青春ストーリー。

第一話 歩こう、歩こう（前書き）

今回は、あまり笑いのセンスは追求しないことにした。
まあ、文学作品として読んでいただけたなら幸いです。
感想も貰えたら幸いです。

あ、あと評価とか入れてくれたら幸いです。

そ、それと、お気に入り登録とかしてくれたら幸いです。

「なんだこいつ」みたいな目で見ないでいただければ、幸いです。

第一話 歩こう、歩こう

もう俺たち、付き合ってるだろ？

友人である小西茜へ、友人ではないだろう野津良平がそのような表明をした事態に対して、私は初め理解しようと思いませんでしたし、理解する必要ありませんでしたし、そもそも理解できませんでした。この発言は相手の意中を無視して勝手に恋人だと断定した言い草です。なんて傲慢なんでしょう。野津という男は天誅を受けて恥を知るべきだと私は思いました。

しかし、幸せそうな顔を並べた彼らは、高らかに笑ってから「それは確認みたいなものだよ」と言いました。

彼らが二年間も交友していたことは知りませんでしたので、確認と言われてみると何だか納得できてしまい、それが癢でしたが、茜が幸せならそれでも良いかな、と私は不満を呑み込んだのです。

でも、やっぱり癢なのです。

私は井江川の土手を歩いていました。今日は茜から遊びに誘われたので、現在は彼女との待ち合わせ場所へ向かう道中です。遊びとは言っても特に嗜む事もなく、ただ一緒に空間で日中を過ごして、お喋りをするぐらいです。以前は乙女チックな話で盛り上がっていたものですが、野津君が仲間に加わってからというもの、容易にそのような言動に走ることはできません。男性というのは胸の内に獣を飼っている生き物ですから、少しでも隙を見せてはいけないので

す。毅然としておかなければ食べられてしまいます。

冬の陽光はどこか白っぽくて辺りが淡く映ります。まるで水彩画の世界を見ているようで、とてもさっぱりしています。土手の脇に等間隔で屹立している木々は冬の冷たい風を受けて身震いするように葉の落ちきった枝を揺らしていました。

ひんやりした空気に当てられていると、頬が張っているような気がして、ひりひりと痛いのです。私は鼻の位置まで赤いマフラーをつまみ上げると、はあっと息を吐いて頬に蒸気をおくりました。足元の雑草は、冬の到来に表情を変えて茶色に映えています。

ふと、横を見ると川原には二人の男性が肩を並べて釣りをしていました。水面には魚の黒いシルエットがいくつも見取れ、それらは川面をすうっと滑っています。時折、急に右折したり左折したりと踊っているようで、成果が芳しくない男性らを嘲るようにも見えませんでした。

土手をしばらく歩き続けると、コンクリートの道はしだいに土に埋もれてゆき、周囲の雑草も私の背丈ほどに大きくなります。すると、前方に錆びれた看板が現れます。近寄ってみると『この先、行き止まり』とばこばこに歪んだ文字が確認でき、私はさらに奥へと足を進めました。

ここらに来ると、ふくらはぎが痛みだします。足の筋肉の両端を握られてぐいっと伸ばされたような感覚があり、私は屈みこんで痛い部分を手で揉みほぐしたりしました。もう何年も同じ道を往來しているのに、この痛みには慣れません。

屈んだ拍子に首を捻って空を見上げると、枯れた雑草に切り取ら

れた青空が見えます。綿を薄く伸ばしたような雲が漂っていて、静止画のように動く気配がありません。

それをじつと眺めていると、私は我を忘れてぼんやりし始めました。あの貼ってつけたような動かない雲も、じつと見つめてやれば、いずれは移動する姿を目撃できるのではないかと思っただのです。何でそんな風に思うのかは自身でも明白としませんが、この止まったものが動き出すのを見たいと思う衝動は自覚できるほど頻繁に起こります。たとえば時計の時針が動くところを見てみようと思計台の前で銅像になったり、満月の晩に月が東から西へ滑っていくのを見ようと、井江川の土手に寝そべって銅像になったりしました。

この衝動に起因するものが何か定かではないし、いつから芽生えた性かも分かり得ません。ふと、気が付くと、また私は銅像になっているのです。

そういえば、幼稚園の頃に行った遠足先の水族館でも私だけ小さな水槽に両手とおでこをぴったりくっつけて動きませんでした。「ヒトデなんか、見てて楽しい？」と後ろから声を掛けられましたが、それでも熱心にヒトデの動く姿を眼に焼き付けてやろうと断固として離れませんでした。映画館のスクリーンみたいに大きな水槽のなかで遊泳する魚よりも、私はいつそう動かない物に執着したのです。

いつの間にか、青空に過去の映像を重ね合わせていた私はハツと我に帰るとお尻を針で刺されたかのようにピンと立ち上がりました。

そうして、茜のもとへ急ぎました。

第二話 じつと、じつと（前書き）

この量だと最終回は三十話ぐらいになりそうです。

ああ、先が思いやられる。

第二話 じつと、じつと

先へ進むと、次第に道幅が狭くなって左右の雑草が寄ってきます。それでも、緑色の海を泳ぐように手で雑草を掻き分けて歩を進めると、急に拓けた土地に踏み出ます。そこはミステリーサークルの円内のように雑草が円形に踏み倒されていて、一歩先に踏み出せば急な登り坂となり、武美山の圏内となります。

武美山とは浅木町の西端を大きく占める山のことです。「悟りを開くは武美山」と云われているのもあり、例年の登山客数は墮落することを知りません。しかし、山肌が荒くて行路を塞ぐかのように木々が覆い茂っているのです、正式な登山道からでないと踏み外して崖から転落なんていうこともあるそうです。

しかし、茜との待ち合わせ場所へ行くには、正式な山道では辿り着けません。

私は洋服を何度か手で払うと、果敢に武美山へ入り込んでいきました。

脇に生えている細い木の幹を手摺りのように伝いながら、昔に川が流れた跡のような、大蛇が通った跡のような、くねくねした山道を汗を滲ませて登りました。

山はどこか湿度が高く神秘的な気配を漂わせる場だと思われていますが、武美山の冬は土も木々も岩も空気も、どこか乾燥しています。乾物屋の軒下に盛られている乾物の山のように、踏みしめても反発力がないというか、どこか精神的にも不安定になってきます。

しばらく無言で登ると、人という文字を逆さにしたように道が二つに分かれている地点へ着きます。一方は相変わらずにグネグネしながら山頂の方へと伸びていますが、もう一方は右に大きく逸れています。私はそちらの方につま先を向けて歩き出しました。

この山道を私や茜以外の誰かが使用しているのかは分かりませんが、私の歩く道は平坦で、整理されているように思えました。上を見ると、覆いかぶさるように枝を伸ばした木々の隙間から日光が差し込み、大小様々な宝石が煌いているように見えました。辺りには木漏れ日でマダラ模様ができています。

肌寒い気温を除けば、まるで夏のような情景です。

前方には覆う木々の抜け口があり、まるでトンネルの出口のように思えます。私は待ち草臥れている茜の姿を想像して、心持ち駆け足で出口へ向かいました。

外界に出ると、花火が弾けるように視界が広がって、武美山へ入り込む前よりも一層に陽光が強まっているように思えました。金魚のふわふわのヒレで撫でられたようなくすぐったい風が頬に触れます。

そこは、一寸先が崖になっていて、町の景色が一望できる場所です。覆いかぶさるような木々が一切生えていないので日当たりが良く、一月だというのに雑草は深みのかかった緑に映えていて、膝の丈まで伸びています。

すぐ手前の町並みから水平線まで一目で見渡せるので、とても爽快な気分になれますし、何より空気が綺麗な気がしました。このスポットは私と茜 最近になって野津君も仲間に加わりました

の秘密の場所なのです。しかし、傍らには周囲の草木にどうも馴染めない汚れた角砂糖のようなコンクリートの廃墟があります。

憚りながらも、そこが私たちの隠れ家『四角い象さん』でした。

唯一木製だった入り口の引き戸は踏み倒されて圧し折られ、東西南北それぞれの壁に一つずつ取り付けられた正方形の小窓は硝子なことごとく割られています。名前の通りにこの廃墟が象さんであったのなら、アフリカの草原地帯の佇まいとして素直に首肯できますが、実際は何のために作事されたのか分からない謎の建築物です。あまりにも遠距離なので、隠れ家のくせに易々と隠れることができません。そんな隠れ家としての存在価値が欠如した四角い象さんではあります。途方のない私と茜の居場所を提供してくれているのですから、それはありがたいことです。今では愛着も湧いて、自身でも四角い象さんを好んでいるように思えます。

長方形の入り口をくぐると、室内には向かい合った二つのソファと、それに挟まれた長机が見受けられます。言ってしまうえば、それぐらいしか物資がありません。天井には小さな電球が取り付けられています。電気は一切通っていませんし、そもそもスイッチが存在しません。昼間のうちは小窓からの陽射しで十分ですが、夜になると抵抗もままならず闇に没してしまいます。

所々の皮が破けて、チーズみたいなスポンジが露出した土色のソファに茜は座っていました。彼女は携帯画面へ視線を落としたまま、最近流行しているラブソングを口ずさみながら、リズムに合わせてハトのように首をはずませていました。まとめて後ろで一つに束ねた髪が上下に跳ねています。

「お待たせ」

私はそう言いながら向かいのソファに腰かけました。まだ野津君は参上していませんでした。

第三話 ぞじさん、ぞじさん

「おお、美津子。早いね」

彼女は携帯電話から視線を上げると、紅潮した顔で私にそう言いました。でも、実際は待ち合わせの時間から少し遅れているのです。

私は訝しげな表情で、彼女の携帯画面を覗き見るような仕草をしました。とたんに彼女は画面を隠して、「なに見てるのよ」と恥ずかしそうにしました。

そうです。全ては野津良平の手引きなのです。きっと、彼女の携帯画面には野津君からのメールで『ごめん。ちよつと遅れる。早く会いたいよ、マイハニー』的な甘い言葉が連なっているのです。なんと破廉恥な！

恋愛ごときに興味はないよ、と嘯いていた頃の茜と比べると目も当てられない有様です。昔はどんなに上機嫌でも歌なんて口ずさむことはなかったし、今では頬の紅潮は常時ともいえます。雑誌で『髪は後ろでまとめると、あごのラインが出て小顔に見えるよ』なんて記事を見た翌日には、ポニーテールで登校してきたのだから、私は苦笑するしかありませんでした。そのように恋の魔手から良いように弄ばれる親友を見るのは忍びありません。けれども、本人が一番に楽しんでいるのですから手の施しようがないのです。

彼女は携帯を閉じると、ろうそくを吹き消すようなため息を吐いてから、窓の外を見ました。「いい天気ねえ」と微笑んでいます。

しかしながら、そんな幸せそうな彼女を見てみると、これでも良

いのかなと思えてくるのです。

小西茜は何とも強情で気が強く、高校入学当時から周囲の人間に距離を置かれていました。

中学生の頃からイジメを　しかも男子生徒から　受けていた女子生徒がいて、その女子生徒は高校でも引き続きイジメを被ることになったのですが、茜は正義感にも溢れるオンナでしたので、イジメに加担した男たちを呼び出し、面と向かって「阿呆！」と怒鳴りつけたというのです。もちろん、男たちにも虐める側としてのプライドがあつたわけですから、おののいて退くわけにもいきません。しかし、イジメを続行するにつけ、茜はイジメ加担者の顔写真を校内掲示板に貼り付けたり、昼休みに放送室へ立て籠もり、イジメ加担者を辱めるような発言をしたり、イジメの事実を事細かに綴って担任教師に提出し、イジメ加担者らを謹慎処分にしたりしました。

そうすると、大方の予想通り彼らは気を滅入らせ、見事にイジメはなくなりました。しかし、その気の強さが露呈したせいか、周囲の人間は波が引くように彼女の前から立ち去つたのです。

あんな奴と一緒にいると、何されるか分かつたもんじゃない、ともしかすると、イジメ加担者らが腹いせに、ありもしない噂を流したのかもしれない。

しかし、私は茜の情の厚い性格に見惚れてしまい、交友を図つたのでした。

それから時が経ち今に至るわけですが、今でも茜には友人があまりいません。ゆえに、野津君との交友が判明したときは一驚を喫し

ましたし、少し嬉しく思ったのも事実でした。親友である私に隠し事をしていたのが癪でしたが、茜が幸せならそれでいいのだと、素直に祝福したのです。

「最近はいいつ、ずっと遊びまわってるんだ。夜中に帰ってきたかと思うと、朝方にはまた金を補充して出て行く。もう、勝手にしろって言ってやった」

茜は突然、独り言のように呟いて微笑みました。

彼女の両親は二年前に離婚しました。茜の父親は現在三十半ばですが、それはもう手の施しようのない阿呆です。離婚前は不特定多数の浮気、底なしの酒好き、場所を選ばない禁煙、喧嘩っ早くて、そのくせに貧弱など、自分の父親であればとつくに縁を切っているような墮落人間だったのです。離婚してからは、鎖から開放された狂犬のごとく町中を遊びまわっていると聞きました。

何度か顔を合わせたこともありますが、さも当然のように「可愛いね、街に遊びに行こうぜ」と私の手を引っ張って行こうとしたので、女の武器は涙ではないと熱弁して、ひそかに特訓してきたラリアットをお見舞いしてあげました。それ以降は私を見ると舌打ちして去っていくようになりました。

しかし、茜のお母さんは対照的で、とても優しく淑やかな女性でした。離婚するまでの高校一年生の間でしか対面していませんが、遊びに行けばいつも風呂掃除をしていたり、軒先に洗濯物を干していたりと家事を着々とこなしていた印象が残っているので、とてもエプロンが似合う若妻だったと思います。

「茜も大変だね」

「まったくだ」

茜は困ったように微笑みました。

「学校のやつらとも距離がどんどん開いてる。授業中に落ちてた消しゴム拾ってあげたら、『わ、わたしのケシゴムかえしてください』って怯えられるのよ、どうなってんの」

彼女の噂は、どんな善行であろうとウロコやエラを付けられ、極悪非道な噂へと変換されます。『路上販売で万引きしていた他校の生徒を捕まえた』から『路上で他校の生徒をいきなり殴った』から『路上で他校の不良をいきなり殴った』から『路上で他校の不良生徒とやりあつた』へ変わります。

そういつた彼女の変換された噂をよく耳にしますが、そのたびに私も怒りに駆られるのです。『頭が悪いのはしょうがない。だが、心の悪い人間にはなるな』と担任の先生がよく口にしていることを思い出します。まったくその通りなのです。

「無視しなよ」

私は、いつものようにその台詞を口にしました。

茜は自分の膝を見つめるようにして、「うん」と小さく返事をしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823z/>

冬風よ、どこへ吹く

2011年12月3日20時53分発行